



「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。」(マタイの福音書6章26節)



江合川をのんびりと泳ぐ渡り鳥たち

心のやすらぎをもとめて

渡り鳥たちの美しさ

大崎平野にも渡り鳥が訪れ、朝晩にいつせいに飛んでいく賑やかな鳥たちの声が空にこだまする季節になりました。私はこの風景がとても好きです。朝に南に向けて飛び、夕方に北に戻っていく鳥たちは、その日

に成すべきことを成そうと協力して行動し、その日のわざを成し終えると、また協力して伊豆沼や江合川に帰っていきま。教会のある場所、歩いて十分でその江合川に行くことが出来ますから、散歩のついでに川岸に行くたびに、渡り鳥たちの姿を

カメラにおさめています。望遠レンズ越しに見る鳥たちの姿は、いつも生き生きとしていて、憂いも嘆きもなく、与えられた「生」を満喫しながら、喜んで生きているように見えるのです。悩みなど何もないかのように。そんな彼らを見ていると、いつも思い煩いに捕らわれている自分の姿が小さく見えてきて、なんだか可笑しくなってしまう。

安息の地を見つけた鳥たち

ところで、この渡り鳥たちは、どこからやって来るかご存知でしょうか。研究者の調査によると、三千キロ以上も離れたシベリアの地から海を渡って来るそうです。彼らの小さな体には「地磁気」を感じ取る器官があつて、それを頼りに、毎年誤ることなく正確に同じ越冬地に飛来できるそうです。「磁気を感じる」ということがどういうことか、私たち人間には想像もつきませんが、彼らにはそんな「安息の場所」を見つける能力が与えられているのです。とても偶然にはできそうもない、誰かが設計して与えたとは思えないような、素晴らしい仕組みではないでしょうか。

安息の場所を求めて

では、あなたにとって「安息の場所」とは、どんな場所でしょうか。家庭がそうかもしれませんし、山登りや釣りかもしれない。またスポーツや読書がそうという方もいるでしょう。それらは皆、私たちが一時、楽しませてくれるものです。ただ、永遠の安らぎではありません。私たちは毎日忙しく、社会や学校で動き回り、学び、働き、休み、楽しみながら生きていきますが、やがてはその歩みが終わる時がやって来るのです。それは私たちが「永遠の安息」を得ているかどうかに関わらず、必ずやります。言い方を換えれば、「精一杯頑

永遠の安息を見つけるには

張って飛び続けてきて、人生の最後に、どこに着地するか」だとも言えるでしょう。

飛行機は、離陸したならば、必ず着陸しなくてはなりません。無限に飛び続けられ飛行機はありません。同様に、「すでに離陸して飛行状態」にある私たちの人生です。この人生を、どこに着陸させていくか。それが、私たちが生涯をかけて取り組む大仕事でしょう。そして私たちが「永遠の安息」を確かに得た、という実感を持ち、そこに人生を着陸させることができたなら、そのような人生は幸福だったと言えるのではないのでしょうか。

天の故郷にあこがれて

実はクリスマスに起こったことは、まさにその「永遠の安息」のありかを、私たちに教えるための第一歩だったのです。聖書はイエス・キリストが天からこの地上に人間として来てくれた救い主である、と語っています。これは、キリストが私たちを「天の故郷」という安息の地に導くための案内人として、わざわざ天から来てくれた、ということの意味します。私たちは、この地上でも道に迷う者ですから、永遠の故郷にどうやっていけば良いのか分かりません。そこで、キリストが私たちの手を取って、天にある永遠の安息への道を教えてくださるのです。クリスマスは、まさにこの恵みの道が始まった時だったのです。私たちが心を少しだけひらいて、キリストを求めていく時、数千キロを旅したあの渡り鳥たちが安息の地を見つけて休んでいるように、私たちも、永遠の安息の希望を持って人生を歩めるようになるのです。